

<前回：ルターとカント>

(1) ルターと宗教改革

0. 世界史的なパラダイム転換：それを準備したもの。

- ・東西教会の決裂、教皇庁の分裂、国民国家の勃興、
- ・貨幣経済の進展、印刷術の発明、
- ・贖宥状の販売(聖ペトロ教会新築のため)、
- ・教会に対する批判的機関としての大学、
- ・キリスト教会の腐敗、
- ・先鋭的な人文主義者の存在、
- ・民衆たちの間の迷信、農民たちの絶望的气氛

1. 宗教改革の思想内容(三大スローガン)

宗教改革の思想内容については、改革者によって幅があり(例えば、聖餐論争)、簡単な要約は困難であるが、その共通項を宗教改革の三大スローガンと言うべきものに集約することは可能であろう。「信仰のみ」(信仰義認論)、「聖書のみ」、「万人司祭説」。これら三つのスローガンの内的連関。

2. 人間は何によって救われるのか?

- ・行為義認、贖宥(いわゆる免罪符)の論理：天国／煉獄／地獄、聖人・教会・功德
- ・ルターは、最終的に、人間の救いは心からキリストの贖罪を信じること(心の純粹さ、内面性)によってのみ可能になるとの結論に到達する。これが、「信仰のみ」というスローガンで意味される信仰義認論である。このような罪と救いの理解は、パウロに遡り、アウグスティヌスの思想系譜に立つものである。 cf. 法然や親鸞の思想との比較。
- ・信仰義認論は、罪や恩寵についての実体論物的理解から、信仰者と神との関係論へ。(罪や恩寵の精神性・内面性)への転換といえる。信じる心の純粹さという個人の人格性が問われることになる。
- ・「万人司祭」説が帰結する。人間は救いに関して、神の前に平等である。
- ・この救いに関する知識の情報公開に対応するのが、「聖書のみ」のスローガン。
- ・中世と近代の間：中世との連続性(修道院におけるカトリック的敬虔、中世の神秘主義、アウグスティヌス神学、オッカム主義・後期中世の唯名論)／近代のシステムの精神的基盤の形成

(2) ルターとカント1(1724-1804)

近代の宗教的な問い：近代以降の思想状況(啓蒙主義、近代科学、宗教批判、世俗化)において、宗教はなおも哲学的思索の対象であり得るか。宗教と近代的合理性との関係はいかなるものか。カント的答えは。

3. 波多野宗教哲学(『宗教哲学』(1935年)、『宗教哲学序論』(1940年)、『時と永遠』(1943年)の三部作における宗教哲学体系)における「ルターとカント」。

6. 波多野宗教哲学：ルターとカント(体験と方法)

「宗教的体験の理論的回顧その反省的自己理解」と定式化された宗教哲学。

(3) カントとキリスト教思想

7. カント哲学がキリスト教思想に対してどのような位置を占めるかは、研究者によって大きく意見が別れる。カント哲学研究の分裂・分節状況。

カントと聖書の思惟との関係を論じる上で、宗教論(たんなる理性の限界内の宗教)が基本的なテキストとなる。

9. 「第一編 悪の原理が善の原理とならび住むことについて、あるいは人間本性のうちなる根元悪について」。カントはたんなる楽観主義的な啓蒙的な近代主義者ではない。

・「根元悪」：人間は生来悪である(悪の性癖(Hang))。

その起源は? 「理性起源はあくまでも究めがたい」(57)

cf. 「アダムにおいてすべての人が罪を犯した」「時間的はじまりに関して見た悪の説明」

・人間の「根源的素質」は「善への素質(Anlage)なのである」。



聖書的人間理解の伝統、神話的語り：神の像／墮罪（原罪）

10. 道德律の意識は「理性の事実」であり、この事実性は善の理念の実践的な実在性を示している。しかし、道德律による確証（定言命法としての形式性における道德性）に加えて、その範例・例示をカントは認めている。
 - ・イエス＝道德的な理想としての一個の人格 → 道德的主体としての自覚をもってイエスを模倣する。福音書読解の意義。
 - ・神の国と教会＝イエス・キリストに合致しようとする人間の集団としての道德的共同体
道德哲学な見地から見た教会の純粋な理想像

(4) ルターとカント2

11. 南原繁『国家と宗教』（1942年。「カトリシズムとプロテスタンティズム」1943年→第三版・補論1945年）における「ルターとカント」



心の純粋さに根拠を有する人格的存在という人間理解において、ルターとカントは繋がっている。ドイツ思想の基本的遺産。

12. 「ルターの宗教改革の問題をはらんだ帰結」

6. シュライアマハーとヘーゲル

(1) 問題

1. ベルリン大学でお互いに意識し合った二人の思想家。

「ヘーゲルにおいては、学問の出発点は常に直接的なものであるが、宗教もまた直接的なものから出発する。宗教における直接的なものとは、感情のことである。ヤコービはこの直接知を信仰と名づけた。感情に関しては、シュライアマッハー批判という形で、その絶対依存の感情を批判する。感情はわれわれも動物と共有する。シュライアマッハーのようによれば、動物もまた宗教を持つことになる」（岩浪哲男『ヘーゲル宗教哲学入門』思想社、2014年、87頁）。

「シュライアマハーは明らかにヘーゲルの思弁的弁証法を念頭に置きつつ次のように語るからである。この止揚は、しかし、もし私たちが思考自体を超え出て、全く異なったもの[存在]を目指さなければ起こり得ない。なぜなら、私がAを考え、他者がBを考えたからといって、止揚されたということはない」、「理性が自己自身となす独り言」（川島賢二『F・シュライアマハーにおける弁証法的思考の形成』本の風景社、2005年、292-293頁）。

2. 近代において分裂しつつある諸伝統を総合する試み。総合の思想家

ティリッヒ：シュライアマハー＝「古典的な神学的総合」、ヘーゲル＝「普遍的総合」

「シュライエルマッハーは、神学の立場からの偉大な総合である。十九世紀の初め、ベルリン大学で彼の同僚だったヘーゲルは、哲学の領域における総合の成就であった」、「シュライエルマッハーとヘーゲル両者の総合の挫折後に、再び総合を試みなければならない」（『ティリッヒ著作集・別巻三』（キリスト教思想史II、宗教改革から現代まで）白水社、154、125頁）。

3. 「シュライアマハー＝神学者、ヘーゲル＝哲学者」といった単純な図式は成り立たない。

哲学的解釈学の父としてのシュライアマハーと三位一体論の思想家としてのヘーゲルなど。

(2) シュライアマハー(Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834)

4. シュライアマハーとはいかなる思想家か

- ①近代プロテスタント神学の父：啓蒙主義的な神学的合理主義と伝統主義との間・総合
同時に、近代的な宗教研究の広範な領域に対して、その起点となった。
- ②啓蒙思想とロマン主義の総合

カント・フィヒテ → ロマン主義運動 → 体系構想 (神学—哲学)
 ヘルンフォート兄弟団 1796 1811
 ハレ大学神学部 (宗教的懐疑) ベルリン、ベルリン大学神学部
 1787(19) 『宗教論』(Reden)・『モノローゲン』

③ 解釈学・弁証法・倫理学、体系家 → 信仰論 (『信仰論』(Glaubenslehre)) の影響
 Dogmatik から Glaubenslehre へ

- ・人間性における宗教 → 弁証神学、宗教の本質概念 (本質論から現象論へ)
- ・実定性 → 個別的で歴史的な諸宗教への定位 cf. 理神論
 高次の實在論、説教者

↓

体系的哲学構想 (『弁証法』) に裏打ちされた宗教論、方法論としての解釈学の構築

5. 『宗教論』の信仰概念

『宗教論』(筑摩書房): 宗教を軽蔑する教養人

- 第一講 弁明 (宗教批判) 第二講 宗教の本質について (宗教本質論)
- 第三講 宗教へ導くための教育について
- 第四講 宗教における集団について、あるいは教会と聖職について
- 第五講 さまざまの宗教について (宗教的多元性)

6. 形而上学・倫理学との区別

宗教の本質について (宗教本質論・第二講) → 「直観・感情」

- ① 形而上学と道徳から区別された「宗教」の固有性
- ② 直観と感情 → 人間存在
- ③ 直観: 有機体的な統一的な宇宙
 無限と有限という関連性 → 表現、象徴
- ④ 感情「無限に向かう憧れ、無限に対する畏れの心」「内なる本性の呼び掛け」

7. 『信仰論』の意義: 教義学の新しいスタイル、自由主義神学

- ・経験から教義へ
- ・諸学の体系内における神学の位置づけの明確化
 倫理学、宗教哲学、弁証学からの借用命題から神学本論へ

8. 『信仰論』序説(Einleitung)

「§2 教義学は神学的学科であり、それゆえもっぱらキリスト教会と関係しているのだから、それが何であるかを説明することが可能になるのは、キリスト教会の概念について了解されている場合に限られる。」(Schleiermacher, 1830, 10)

「§3 すべての教会共同体の基礎である敬虔さは、それだけで純粹に考察される場合、知や行為ではなく、感情の、あるいは直接的自己意識の規定された形態なのである。」(ibid., 14)

「§4 敬虔さの表出はたとえどんなに多様であっても、敬虔さを他のすべての感情から区別することを可能にする敬虔さの諸表出すべてに共通なもの、つまり敬虔さの自己同一的な本質は、次の点に存する。すなわち、それは、我々が自らを絶対的に依存的であると意識していること、あるいは同じことであるが、我々が自らを神との関係性において意識しているということである。」(ibid., 23)

9. シュライアマハーの議論のアウトライン

「教義学・教義→教会・信仰共同体→敬虔さ→感情・直接的自己意識→絶対的依存感情」ある(神の定義)。

10. 弁証法: 対話における思惟の形成=解釈学的。

伊藤慶郎『シュライアマハーの対話的思考と神認識——もうひとつの弁証法』から。

- ・「弁証法」の基本構造 (「第一部超越的部門」を中心に): 「哲学的作業の技法論としての

弁証学の課題」が論争状態から知（真理）へと思考を導くことであることを示し、この課題が知（真理）をめぐる「主観間相互の一致」「思考と対象との一致」という二つの観点から遂行される。（思考の二つの機能である「知的機能」と「有機的機能」。知の形式である「概念」と「判断」。）

- ・知は一人の人間の思考によって獲得されるものではなく、他者との思想の交換という対話的思考においてのみ接近可能である。絶対的原理から知の体系を演繹的に導出するのではなく、多様な思考という「有限な現実」とどまらず「それらを統合していくという知の生成と連関」の解明を目指す点に、「ドイツ観念論よりむしろハーバマスの「コミュニケーション行為論」と平行関係」が確認できる。対話者の「合意」による「共通の世界」の成立、つまり、「対話遂行という言葉を紹介した他者とのコミュニケーション」（「主観間相互の一致」）における私たちの世界の形成は、確かにハーバマスの真理の合意説と近接する。
- ・存在の実在性を思考作用に還元するという観念論とは明確に一線を画しており、「存在と思考とは異なり、思考の外の存在は知が成立する基本的条件」であることを承認する。シュライアマハーの弁証論の立場は、「思考は知的機能すなわち理性と、有機的機能から成り立っており、知は両機能の産物である」という論点へと展開されることになる。理性的活動は合意形成に関わり、有機的活動は実在との対応に関わっている。

<参考文献>

1. シュライエルマッハー『宗教論』岩波文庫、筑摩書房。
F.D.E.シュライアマハー『キリスト教信仰』の弁証——『信仰論』に関するリュッケ宛ての二通の書簡』知泉書館、2015年。
2. ティリッヒ『キリスト教思想史Ⅱ』（『ティリッヒ著作集』別巻3）白水社。
3. 波多野精一『宗教哲学・宗教哲学序論』『時と永遠』岩波文庫。
4. 武藤一雄『神学と宗教哲学との間』創文社。
5. 川島堅二『F・シュライアマハーにおける弁証法的思想の形成』本の風景社。
6. 伊藤慶郎『シュライアマハーの対話的思考と神認識——もうひとつの弁証法』晃洋書房、2013年。
7. ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち——パウロからカール・バルトまで』新教出版社、2014年。

（3）ヘーゲル哲学

11. 「わたしがこれまで示唆してきたことは、ヘーゲルの思惟の本質的なものを理解するためには二つの現実的な根、つまり宗教的な根と政治的な根が重要である、ということなのである」（Tillich,1931/32, S.109）。
12. 三位一体論的哲学
「ヘーゲルは神学に、少なくともプロテスタント神学に、三一論を課題として返還した。合理主義においても感情神学においても、三一論は広く忘れられてしまっていた。しかるに三一論にとってのヘーゲルの意義は、神学へのこの影響のうちにあるのではなく、その意義は、彼が三一性を同時に哲学的課題として開陳した——三一性哲学を意図したという点にある」（イエシュケ、118）。
13. 三位一体論は、19世紀のキリスト教神学（自由主義神学）においてよりも、むしろヘーゲル哲学において保持された。→ヘーゲル哲学のキリスト教思想としての意義。
cf. シュライアマハー『信仰論』における三位一体論の位置
14. ヘーゲル自身が直面した歴史的な現実状況。30年戦争の帰結と啓蒙主義の登場に規定されたドイツの宗教的あるいは政治的な分裂状況
宗教：正統主義の国家宗教と啓蒙化された個人宗教との対立

政治：半封建的な生活形態の下で絶対主義的国家と国家宗教に支配されている大衆と啓蒙的な精神的自律性を要求する教養市民層という二つの社会階層間の分裂。統一国家の不在。

15. ヘーゲルの思想的課題：「啓蒙の土台の上に新しい民族文化」(ibid.,S.64)を建設することであり一民族の教育(Volkserziehung)一、また「批判的理性の自律によって規定された時代と精神状況における宗教的な現実化」(ibid.,S.110)の問いに対して答えること。

↓

- ・分裂状況を克服。ヘーゲルの思想的営みは分裂し対立に陥った諸要素の総合(普遍的総合)の試み。ヘーゲル哲学を規定しているカイロス
 - ・ヘーゲル哲学の魅力あるいは意義
 - ・歴史意識に合致した包括的な論理体系(一貫性と包括性)
 - ・伝統を統合し歴史を説明する能力、多産性
16. ヘーゲル：絶対精神の自己実現と英雄。理性の狡知。→ 歴史における宗教
「歴史的人物、世界史的個人とは、このような普遍をその目的の中に蔵しているような人々」(『歴史哲学 上』岩波文庫、96)、「これらの個人は、その目的の中に理念一般に関する意識をもっていたのではなかった。彼らは実践人であり、政治家であった。しかし同時に、彼らは時代の要求と時代の趨勢とについての洞察をもつ思想家であった」(97)、「情熱の特殊な関心と普遍的なものの実現とは不可分のものである」、「特殊なものは、互いに闘争して、一方が没落しつ行くものにほかならない。対立と闘争に巻きこまれ、危険にさらされるのは普遍的理念ではない。普遍的理念は侵されることなく、害われることなく、闘争の背後にチャンと控えている。そしてこの理性が情熱を勝手に働かせながら、その際に損害を蒙り、痛手を受けるのは[理性ではなくて]この情熱によって作り出されるものそのものだということを、われわれは理性の狡知(List der Vernunft)と呼ぶ」(101)。
「神が世界を統治するのであって、その神の統治の内容、神の計画の遂行が世界史である。そうして哲学は、この計画をつかもうとする。というのは、この計画に基づいて実現されたもののみが現実性をもつのであり、それに外れたものは単に腐った実存(faule Existenz)にすぎないからである」(107)。
17. 歴史の具体的な状況から原理へ。
歴史の個々の現象を歴史の表層に現れた偶然の出来事として論じるのではなく、こうした諸現象を規定する原理へと問題を掘り下げてゆくこと。啓蒙主義の登場によって鮮明になった分裂・対立の状況を、歴史を貫く動的な原理の問題として追求する態度。
18. 近代ドイツの運命を規定する原理
アブラハムを典型(人間的可能性の型・モデル)とするユダヤ教の精神=対立の原理。
19. 対立の原理と分裂の克服
- ・近代ドイツの政治的宗教的な分裂状況の問題→歴史を規定する原理の問題
→対立の原理と同一性の原理の問題
 - ・近代ドイツの状況を規定する対立の原理(das Prinzip der Entgegensetzung)
哲学：啓蒙思想あるいはカント哲学の二元論
宗教的生：ユダヤ教の精神とその典型としてのアブラハム
20. 典型としてのアブラハム：血縁関係に集約された自然の絆からの分離、自然(直接性)に対する敵対・支配(アブラハム物語における故郷から異郷への出発、息子イサクの犠牲などの出来事)
21. 自然に対する巨大な不信・敵意・蔑視の態度 → 故郷を喪失し世界に離散するというユダヤ民族の運命 → 敵対的な自然を征服し自らのみを神の選民とする態度
- ・ユダヤ民族、神のうちに支配を通じた自然との統一を見いだした。
故郷からの分離と遊牧生活(Nomadentum)において表現された神と世界の対立性の意

識を通して、存在するものは一つの全体として反省されることになる(=客体化、啓蒙の原理)。「存在するものの全体性(die Ganzheit des Daseins)の成立は反省、つまり生のプロセスの破れにおいて生じる」(ibid., S.165)。

↓

自己意識と世界・自然との対立は、存在するもの一切を創造されたものとして統一し支配する排他的な一神教、不幸な宗教(Religion des Unglück)へと集約。

ユダヤ教の神：戯れを知らず、自然的な面に欠けている。分離、支配、服従は不幸であり、愛、美、生、喜びといったもの(幸福)に対立している(ibid.,S.175)。

アブラハムにおいて出現したユダヤ教の精神は、キリスト教と後期ローマを經由して、ドイツ民族の運命になった。

22. 歴史的な分裂の克服も、原理のレベルから、つまり同一性の原理において論じられねばならない。

ヘーゲル：受肉論において具体化された同一性の原理(ヨハネ福音書のプロローグ)こそが、神と人間、人間と自然の対立を克服するための原理として、しかも対立の原理を克服するものとして位置づけられる。

23. 生の弁証法的運動と愛における和解

生の内的運動(弁証法)。対立という生の運命的契機とそれを克服する愛の問題。

「愛のうちに生そのものが存する。それは自己自身の二重化として、かつまた自己自身の一致としての生である。生は未発展な統一から出発し、教養・反省を通して、完成した統一へと至る円環を通り抜ける」(Nohl. 379)

フランクフルト講義(Tillich,1932,S.209)で引用されたこの「愛」と名付けられた断片。

「愛は主観と客観の統一でありこの対立の克服である」(ibid.,S.205)とあるように、運命が生の内的な自己分裂であるのに対して、愛はこの分裂した生の再統一・和解であり、同一性の原理の現実化に他ならない。

↓

愛において再統合される諸対立とは、市民社会における諸対立、たとえば法、私有、権力などの現実性を包括するものとなる一、「三重の行為。すなわち、直接的な統一、対立、媒介された統一」(ibid.,S.199)という弁証法において動的に展開する。

24. 三段階において進展する生のプロセスは、様々な諸対立を運命的に生み出しつつも愛における和解・再統合に向けて進展する。→ 精神の弁証法として概念化され一つの哲学体系へともたらされる。→ 体系と生

<参考文献>

0. 『ヘーゲル全集』岩波書店。

1. ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』平凡社。

2. ヘーゲル『宗教哲学講義』創文社。

3. W. イエシュケ『ヘーゲルの宗教哲学』早稲田大学出版部。

4. 加藤尚武編『ヘーゲルを学ぶ人のために』世界思想社。

5. 岩浪哲男『ヘーゲル宗教哲学入門』理想社。

6. ティリッヒ

GW: *Gesammelte Werke*. Hrsg.v.Renate Albrecht. Evangelisches Verlag 1959-1975

EW: *Ergänzungs und Nachlaßbände zu den GW*. de Gruyter 1971-

1931/32: *Vorlesung über Hegel*, in:EW.VIII

1932: *Der junge Hegel und das Schicksal Deutschlands*, in:GW.XII

7. K・リーゼンフーバー『近代哲学の根本問題』知泉書館。

8. W. Pannenberg, *Theologie und Philosophie*, Vandenhoeck, 1996.